

新型インフルエンザ対策に関する小委員会の継続審議事項

平成 27 年 9 月 18 日
新型インフルエンザ対策に関する小委員会

新型インフルエンザ対策に関する小委員会(平成 27 年 9 月 11 日)は、抗インフルエンザウイルス薬備蓄目標及び薬剤の種類と量に関する作業班の議論を了承し(資料 1-2)、加えて以下の事項について継続的に検討する。

■ 備蓄薬剤に関する事項

【重症患者に対するラピアクタの使用】

- ・ ラピアクタは病原性の高いウイルスが発生した場合、使用が増える可能性がある。重症患者への対応は、重要な位置付けとなるため、今後季節性インフルエンザで重症患者におけるラピアクタの有効性を注視し、新型インフルエンザ発生の際に適切な対応ができる様、情報の収集に努める。

【備蓄薬の適正な配分】

- ・ 新型インフルエンザ等対策ガイドラインには、備蓄薬の適正配分が記載されているものの、不均等配分の懸念が残る。備蓄している薬剤を具体的に現場にどのように届けるのか議論が必要である。
- ・ パンデミック発生の際、備蓄薬剤に加えて流通薬剤があることも考慮すべきである。流通薬剤についても適切に臨床現場に届ける方法について検討を要する。

■ 備蓄目標に関する事項

【新型インフルエンザ発生時の被害想定】

- ・ 新型インフルエンザ等政府行動計画の被害想定では、シミュレーションに FluAid が使用されているが、今後新たな科学的根拠に基づいた被害想定のか考え方等が報告されれば、俎上に載せることを検討する。

【重症患者への倍量・倍期間治療】

- ・ 重症患者の倍量・倍期間治療について、明らかな有効性を示す科学的エビデンスは乏しい。理由の一つとして、重症化の原因が基礎疾患の有無等多岐にわたり、重症患者の評価が難しいことが挙げられる。そのため、引き続き季節性インフルエンザの重症例で有効性を参考にしつつ、倍量・倍期間治療のあり方について情報収集を行う。

【季節性インフルエンザとの同時流行】

- ・ 疫学的には同時流行の可能性は少ないが、引き続きさまざまなシミュレーションを実施することを検討する。